

# 【3】三元十八神道次第

写本1冊

大阿闍梨法印妙海

授与

春光山円覚寺

尊岸拝写

〔書名よみ〕さんげんじゅうはちしんとうしだい  
〔著編者〕未詳  
〔写刊年次〕慶應四年（一八六八）

〔外題〕三元十八神道次第

〔内題〕三元十八神道次第

〔その他題〕ナシ

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕良好

〔装訂〕袋綴装（紙綴綬）

〔丁数〕一三丁 〔本文用字〕漢字

〔一面行数〕八行 〔表紙〕

本文共紙 〔法量〕縦一六・八糸×横一七・八糸 〔料紙〕斐紙（雁皮紙）  
〔界線〕ナシ 〔書入〕朱書注記（首頂点・見出点・合点・圈点・朱引）

〔印記〕ナシ 〔備考〕尊岸函66。

〔奥書〕「一二丁オ・伝授識語」

右十八神道次第吉田家之大秘書也

智積院一老智門法印以所持之

本書写者也

安永四<sup>乙</sup>歳卯月十九日書畢

安政五年三月吉祥日

御流神道玉水流七世

仏子妙海求之

（一二丁オ・書写識語）

慶應四<sup>戊</sup>辰年十月廿一日書写之

伝師 津軽弘前 金剛山現住

院家

## 〔解題〕

本書『三元十八神道次第』は、中世に隆盛をみせた吉田神道を淵源として、近世の御流神道玉水流において相伝された神道次第書である。

「三元十八神道」とは、吉田兼俱（一四三五—一五一二）が唱えた吉田神道の原理で、神道を体（三元）・用（三妙）・相（三行）に分け、そのうち体の天道・地道・人道の「三元」にそれぞれ六神道が加わり「十八神道」としたもの。この吉田神道の基本理念にもとづく神道修法として近世期にいたるまで三元十八神道行事が執行され、その次第をとりまとめたものが『三元十八神道次第』にあたる。本書は東京大学宗教学研究室本ほか各所に伝存が確認され次第内容も概ね同一であるが、円覚寺所蔵本の特徴として注目すべきは、それが「御流神道玉水流」の相伝にかかる点である。

前掲の奥書によると、この「吉田家之大秘書」を所持していた京都・智積院の智門相伝本を安永四年（一七七五）に書写したものと、安政五年（一八五八）に御流神道玉水流の第七世・妙海（一八三一—一九〇七）が求得し、さらに津軽弘前の金剛山最勝院家となつた妙海より、慶應四年（一八六八）十月（明治改元は同年九月八日）に円覚寺第二十四世・尊岸（一八〇三—一八七二）が伝受・書写した経緯が知られる。御流神道は真言宗に伝わる神道（両部神道）の一派で、玉水流は活濟（一七〇八—）を開祖とする。南山城・西福寺を基点としたが、活濟より続いた西福寺内での法流の正嫡は第五世・長濟で途切れ、智積院・

饅啓の流派が本流となつた。その四代後の妙海が六波羅蜜寺の契理より受法することで復流し、爾後、幕末明治期には西福寺における玉水流復興を志すも記録なきままに忘れ去られてしまつたとやれでいる。

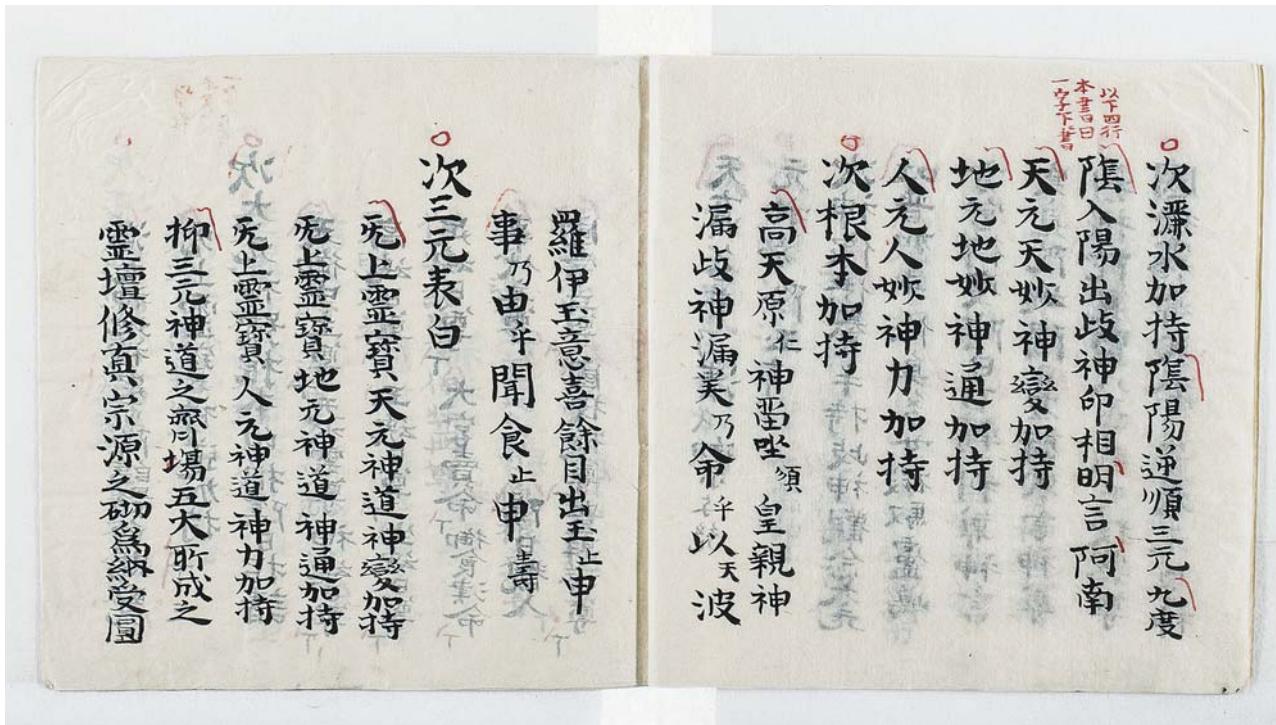
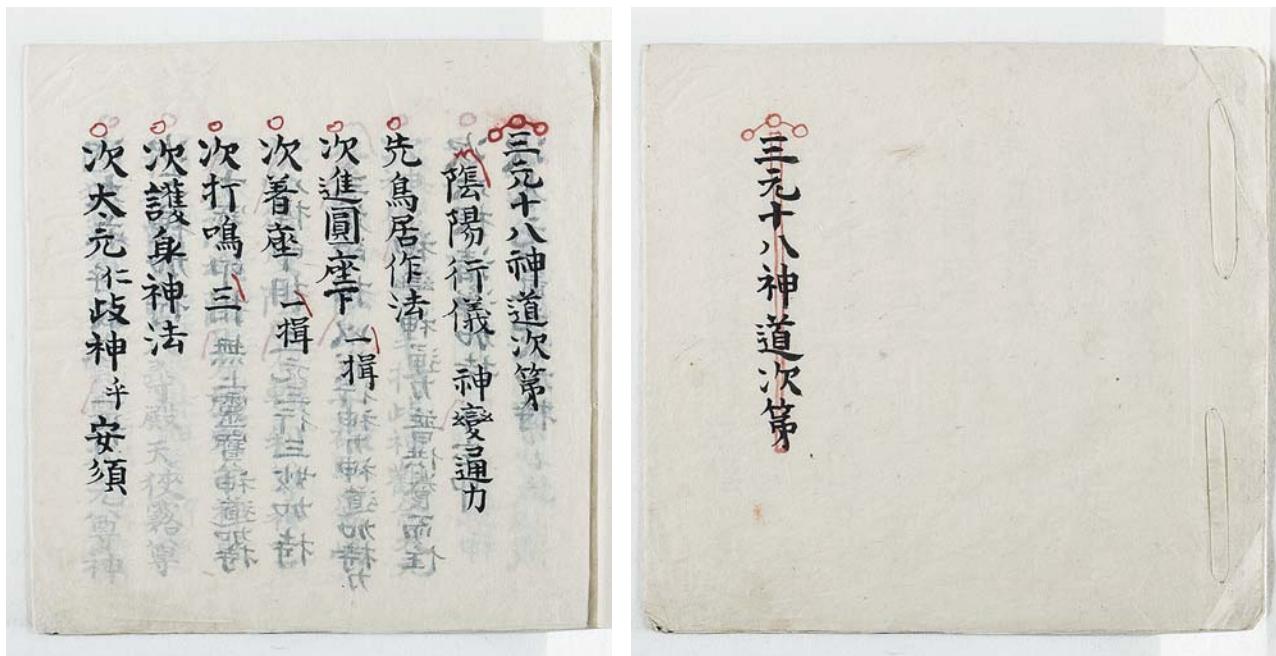
本書は、そのような御流神道玉水流が津軽一円にも伝播していたこと、そして深浦円覚寺にも相伝されていたことを如実に物語る点で、ひいては幕末明治期における宗教環境を考える上で、じつに興味深い。同軌の資料としては、円覚寺には他にも、第一十六世・義觀（一八五五一九二一）相伝『神道護摩私大事』（報告書第一集【19】渡辺麻里子解題参照）をはじめ、『両部習合灌頂次第』『御流神道伝授聞書 附灌頂見聞記』（本報告書【5】【6】解題参照）など御流神道玉水流ゆかりの伝本が現存している。最新の寺院聖教調査として現在進行形にある御流神道玉水流研究に資するとともに、北東北における「神道の地域センター」としての津軽（弘前最勝院・深浦円覚寺）の存在意義を再定位する上でも、本書に秘められた学術的意義はきわめて大きいものがある。

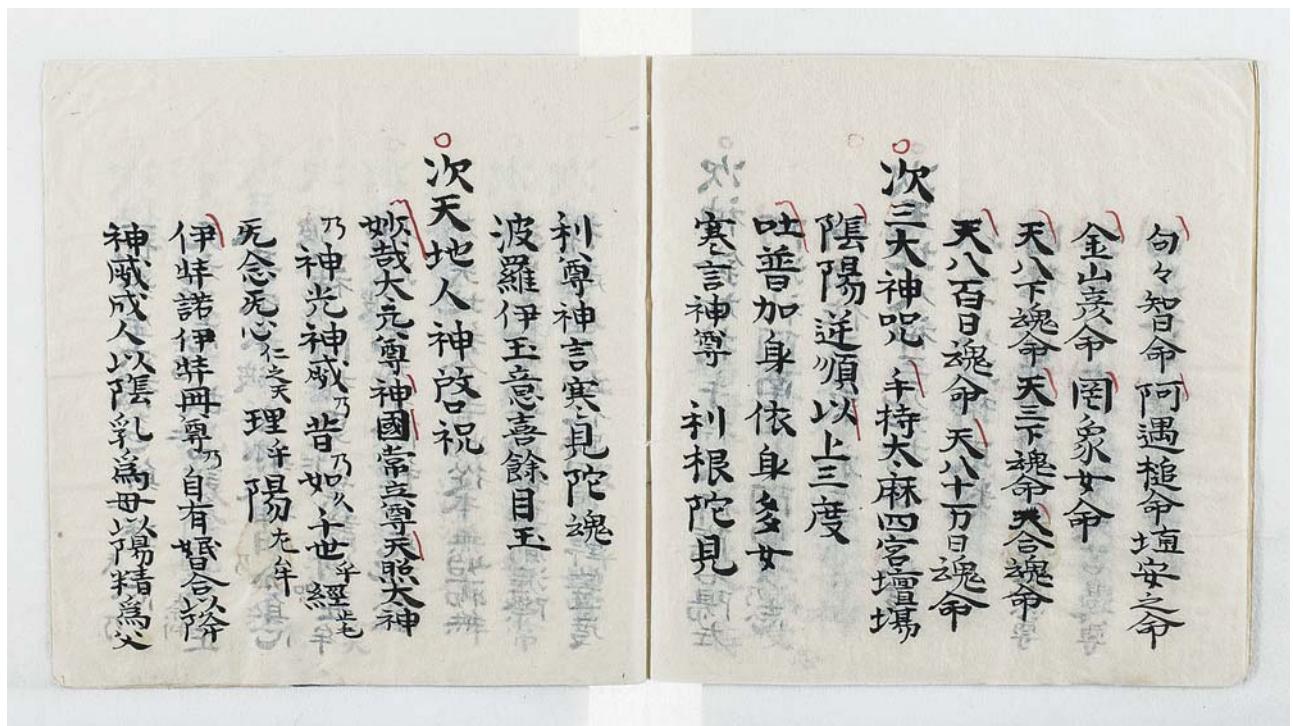
### 〔参考〕

- ・出村勝明『吉田神道の基礎的研究』（神道史学会、臨川書店、一九九七年）
- ・特設展示「南山城井出町西福寺神道灌頂資料」（国文学研究資料館、二〇一四年）
- ・シンポジウム「南山城と神道灌頂—井出町西福寺所蔵資料をめぐって」（『仏教文学』第四一号、一〇一六年四月）所収、中山一磨「西福寺の歴史」／向村九音「西福寺と椿井文書」／伊藤聰「西福寺の神道灌頂」／鈴木英之「神道灌頂道場図の復元」
- ・H P 「橘氏ゆかりの御寺 遍照山西福寺」 <http://henjozan.xsrv.jp/>
- 「神仏習合・玉水流法脈」 <http://henjozan.xsrv.jp/category5/entry10.html>

・木下智雄「日光院英仙が相承した唯一神道について」（『印度學叢』第二二号、一〇一八年）  
・木下智雄「日光院英仙が相承した唯一神道について」（『京都宗教論叢』第二二号、一〇一八年）  
・『最勝院史 図版編』壹・貳（最勝院史編纂委員会、一〇一〇年）  
・『寺院文献資料学の新展開』第一〇巻『神道資料の調査と研究 I 玉水流特集』（伊藤聰・編、臨川書店、近刊）

（原 克昭）





○次座揖  
○次立揖  
○次退下

本社立吉田家之本書折本木瀬島子金漆卦  
物長五寸七分六厘橫半分程豎卦六  
四寸分六分卦片面行上卦外六分下卦  
三分也 金漆表絣

金紙表題 長三寸三分 橫九分

三元十八神道次第

長三寸三分

慶應四戊辰年十月廿一日書寫之  
傳師 津輕弘前 金剛山現住  
院家

右十八神道次第吉田家之大秘書  
智積院一老智門法印以所持之  
本書寫者也

安永四乙未歲卯月十九日書畢

安政五年三月吉祥日

御流神道玉水流七世

佛子妙海求之

授與

春光山圓覺寺

草岸并寫